

コロナ禍の食肉をめぐる状況（要約）

2021年5月14日
公益財団法人日本食肉流通センター

1 概要

2020年1月に、日本で、新型コロナウイルス感染者が初めて確認されました。それ以降、いわゆるコロナ禍での食肉をめぐる状況の概要は以下のとおりです。

- 牛部分肉セット価格は、和牛及び交雑牛で、昨年1月から概ね4～6月まで低下、その後、回復傾向に入り、12月には前年水準に戻し、今年1月以降前年比高で推移してきました。乳牛は価格変動がわずかでした。
価格変動を3品種別にみると、2020年の価格下落率の大きさは、交雑牛、和牛、乳牛の順で、価格回復の早さは、交雑牛より和牛が早かったです。
豚部分肉セット価格は、昨年2月と3月は前年比安でしたが、4月以降前年比高で推移し12月のみ前年比安となり、今年1月から3月まで前年比高が継続しています。
- 部位別価格をみると、牛肉では3品種とも、単価の高いロインの下落率が最も大きく、価格の回復も緩やかでした。
豚肉では、逆に、単価の安いももの価格上昇率が最も大きかったです。
- 食肉関連の売上動向は、外食系が減少し、内食系が増加しました。
- 2020年の牛肉の流通量は、国産品が増加し、輸入品が減少し、全体で減少しました。
豚肉の流通量は、国産品が増加し、輸入品が減少し、全体で増加しました。

2 食肉の価格動向

○部分肉セット価格

ア 牛肉

和牛及び交雑牛の部分肉セット価格は、昨年1月から低下を続け概ね4～6月を底として大きく下落し、その後、緩やかに回復し、12月には前年並みか前年を超える水準となり、今年1月から3月までは前年比高が継続しています。

乳牛肉への影響は小さくて価格変動がわずかで、価格が少し上昇しました。

部分肉セット価格 2020年 前年比価格変化率

和牛 5%安、 交雑牛 8%安、 乳牛 1%高

イ 豚肉

豚部分肉セット価格は、昨年2・3月は前年比安でしたが、4月以降は、牛部分肉セット価格と異なり、前年比高となり11月まで継続し、12月は前年比安になり、今年1月から3月まで前年比増となりました。2020年 前年比3%高。

○部位別価格

ア 牛肉

部位別にみると、2020年で、和牛「4」規格、交雑牛「3」規格、乳牛「2」規格とも、単価の高いロインの価格下落率が最も大きかったです。

ロインの価格低迷はコロナ禍で長期化すると、食肉卸売業者はみえています。

前年比下落率 和牛 21%、交雑牛 20%、乳牛 12%

その他で特徴的だったのは、和牛ではももセットが堅調で、交雑牛ではももセットの下落率が最も小さく、乳牛ではかたロースが堅調でした。

2020年 前年比価格変化率

和牛ももセット 3%高、交雑牛ももセット 5%安、乳牛かたロース 4%高

ももセットは、部分肉セットより単価が安く、食肉の販売が好調であったスーパー等で切り落としの材料として使用されるのが定着していたこと及びロインの価格低迷が長期化すると見込んだ部位別価格の見直しを食肉卸売業者が行ったことが、背景にあると考えます。

イ 豚肉

価格動向を分析した3部位、もも、ばら、ロースとも、価格がセットを上回る前年比高となり、前記の順で2020年の価格上昇率が高かったです。

前年比上昇率 もも 9%、ばら 8%、ロース 5%

ももは牛肉と同様に切り落としの材料で定着していたこと、ばらを利用した調理法の普及による長期的なばら価格の上昇傾向が維持されていたこと、部分肉セット価格が高水準で推移していた中で部位別価格の見直しを食肉卸売業者が行ったことが、背景にあると考えます。

3 食肉の消費、外食系が減少、内食系が増加

食肉卸売業者の主な販売先での2020年の売上動向をみると、外食系が減少し、内食系が増加しました。

ア 外食系の売上

外食は緊急事態宣言発出等に伴う外出自粛や休業要請等に大きく影響されました。

外食系の内訳をみると、テイクアウトやドライブスルーの利用が可能なハンバーガー等の洋風ファーストフードのみが売上で前年比増となりました。しかし、焼き肉や単価の高いディナーレストランの売上は前年比11%減、36%減となりました。今年1月以降もその傾向が継続しています。外食産業の売上は、コロナの収束がみえてこないとな本当の回復は難しいと食肉卸売業者はみえています。

イ 大手スーパーの畜産品の売上

肉食系を大手スーパーの食肉を含む畜産品の売上でみると、食料品全体を上回る増加率を昨年2月以降継続しており、かつ、4月以降今年1月まで前年同月比10%超増と極めて好調でした。2月になって、10%を下回る増加になりました。今年4月以降は、昨年ほどの増加率は見込めないと、食肉卸売業者はみえています。

ウ 家計調査からみた食肉の消費動向

家計調査から2020年の動向をみると、食料消費支出がわずかに減少した中で、外食への消費支出が29%減少、肉類への消費支出が11%増加し、調理食品もわずかに増加しています。牛肉及び豚肉は、購入量、購入金額及び単価のすべてが増加し、外食への支出が減少した状況下、自宅で少しぜいたくをしたいというニーズ先として肉類が選択され、国産食肉への志向が高まったと考えられます。

4 食肉の需給動向

○牛肉

ア 流通量

2020年、和牛肉の流通量が増加、交雑肉や乳牛肉が減少し、国産牛肉全体では流通量がやや増加しましたが、流通量の約6割を占める輸入牛肉が減少したため、牛肉全体の流通量は減少しました。

イ 輸入の数量及び単価

2020年のロイン系の輸入量は、冷蔵品が26%減の28,275トン、冷凍品が34%減の5,047トンと大幅に減少し、輸入単価も、冷蔵品が9%減の1377円、冷凍品が7%減の642円と下落しました。ロイン系以外の部位の輸入量はわずかに減少し、輸入単価の下落率はロイン系より小さかったです。国別にみると、豪州からの輸入が減少し、米国からは増加しました。

輸入品でもコロナ禍はロイン系の単価の高い部位への影響が大きかったと考えます。

ウ 輸出量

2020年の牛肉の輸出量は、前年比12%増の4,845トンとなりましたが、輸出単価が13%減の5,960円となったため、輸出金額は3%減の289億円でした。

輸出量の53%を占めたロイン系の単価が、冷蔵品で前年比7%減、冷凍品で10%減と国内市場の下落率より小さかったものの、和牛肉ではないとみられる単価1,231円のフィリピン向け輸出量が135トンあったため、輸出単価が大きく下落しました。

輸出増加により、国内のロイン市場が底支えされています。

○豚 肉

ア 流通量

豚肉の2020年度2月までの11ヶ月分の流通量は、流通割合がやや多い国産品が2%増加し、輸入品が1%減少したため、全体として0.3%増加しました。

イ 輸入の数量及び単価

豚肉の2020年度の2月までの11ヶ月分の輸入量は、冷蔵品で前年同期比1%減、冷凍品で13%減、全体としては8%減です。

輸入単価は、輸出国におけるコロナ禍で食肉処理場での陽性者の発生等による操業停止等で昨年7月は冷蔵品で前年比10%高となりましたが、11ヶ月分で見ると影響はわずかでした。

(参考) 訪日外国人数と国産牛肉価格との関連の分析

訪日外国人観光客数と国産牛肉価格には正の相関があること、並びに、観光庁の2019年の調査において、外国人が訪日して1番満足した飲食で肉料理が2位と差のある1位であること及び飲食費の単価が上昇してきたことからみて、インバウンドの増加により牛肉価格が上昇してきた中で、インバウンドが激減したため、単価の高い和牛肉価格・部位が影響を受けたとみられます。一部の高級焼き肉店では、外国人観光客がいなくなり売上が激減したと、業界関係者から聴取しました。

5 まとめ

行政による外出自粛要請、緊急事態宣言及びまん延防止措置の下、食肉の売上は、スーパー等の小売では好調でしたが、外食産業では大幅に減少し、業務用牛肉の販売量が減少しました。和牛肉及び交雑牛肉の価格は昨年一時大きく下落しましたが年末には回復し、今年になっても堅調です。政府によるコロナ対策が価格回復に大きく寄与したと業界はみています。

総じていえば、これまでのコロナ禍により、国産品及び輸入品を問わず、単価の高いロイン等の部位の売上が悪くなった一方、単価の安いもも等の部位及び豚肉の売上よくなりました。この傾向はコロナ禍が収束するまで継続すると、業界はみています。

本件に関するお問い合わせ先

公益財団法人日本食肉流通センター

情報部 石橋 仁、小野 雄平、能城 英里華

TEL 044-266-1172